

川崎重工業、次期輸送機(XC-2)試作1号機納入

川崎重工業は3月30日、次期輸送機(XC-2)試作1号機を防衛省に納入した。本機は、P-X(現XP-1)とともに平成19年7月4日にロールアウトし、本年1月26日に初飛行を果たしたものであり、その後社内飛行試験等を着実にこなしてこの日を迎えた。以下に、納入式典の様相を中心に速報する。

1. 納入式典

本機は、ロールアウト後に一部不具合が見つかり、防衛省及び開発チームが協力して対策を施した結果納入の運びとなったものであり、関係者の感慨もひとしおのものがある。その思いを表したような晴天の下、納入式典は、白地に赤色のストライプという防衛省技術研究本部カラーで彩色された機体を前に、午前11時半からハンガーにおいて挙行された。

式典には、防衛省から北澤防衛大臣、岡崎装備施設本部長、佐々木技術研究本部長、外蘭航空幕僚長、経済産業省から広瀬航空機武

器宇宙産業課長等、政府機関及び関連地方自治体の関係者、並びに川崎重工業はじめ協力会社の関係者が多数参加し、国歌斉唱の後、神事が執り行われた。その後、製造側を代表した川崎重工業 長谷川社長の挨拶、防衛省への目録の贈呈、それを受けて北澤防衛大臣から防衛省を代表して挨拶が行われた。

そして、監督官及び受領官への花束贈呈に続き、各界代表者によるテープカットが行われ、納入機体は静かにハンガーから引出された。

最後に、この日を記念して出席者全員による写真撮影が行われ、昼過ぎ式典を終了した。



来賓によるテープカットセレモニー

(写真提供：(株)ジャパン・ミリタリー・レビュー)

2. XC-2の特徴

平成13年12月、川崎重工業 岐阜工場に、三菱重工業、富士重工業及び日本飛行機を機体開発協力会社とする設計チームが作られ、世界では極めてまれなP-X（現XP-1）とC-X（現XC-2）という2機種の間同時開発が始められた。同時開発のメリットを活かし、主翼外翼部分、水平尾翼の殆んど及び風防の構造、並びに多くの搭載装備品について、C-XとP-Xとの共有化を図り、さらにDMU（デジタル・モックアップ）といった最新のITを活用した設計手法を取り入れ、開発コストおよびライフサイクルコストの低減を図った。

P-XはP-3Cの後継機として開発された固定翼哨戒機であり、ロールアウト後、XP-1として一足早く平成20年8月に防衛省に納入され、現在防衛省技術研究本部及び海上自衛隊第51航空隊により技術・実用試験を実施中である。また、量産機であるP-1は、4機が製造中である。

今回納入されたXC-2はC-1の後継輸送機と

して開発され、有事における空輸任務などの他、大型装備品搬送や海外貢献を可能にするため、搭載量、航続距離及び巡航速度を大幅に高めた我が国最大の国産機である。

米国GE社製のターボファンエンジンを2基搭載することで高速進出性を実現し、また最新の飛行管理システム及び搭載卸下システムを採用して戦術任務を容易に遂行できるようにしている。さらに、操縦系統にFBW（フライ・バイ・ワイヤ）を採用し、操作性及び整備性の向上、そして軽量化を図っている。

3. 今後の予定

現在、全機静強度試験（01号機、平成18年9月納入）および疲労強度試験機（02号機、平成22年3月納入）の各種試験が行われており、今回納入された試作1号機は、これら試験と並行して、防衛省技術研究本部及び航空自衛隊飛行開発実験団により各種評価が実施される予定である。



ロールアウト中の次期輸送機（XC-2）試作1号機

（写真提供：㈱ジャパン・ミリタリー・レビュー）

〔(社)日本航空宇宙工業会 調査部長 北村 安幸〕